

すべての子どもの最善の利益のために

# Shinyukai

Concept Book



社会福祉法人森友会は  
東京都・福岡県・大分県で  
認可保育園・認定こども園を  
運営しています。

# 森友会の 子育てコンセプト

Shinyukai Concept



Concept

1

## 「大勢の友達と遊び、大人に見守られて育つ」環境がある

少子化がどんどん進んでいるなか、友達ができる場所は限られてきています。安心して遊べる公園も少なくなり、コミュニケーション能力を育む、時間・空間・仲間がさらに減っていくことが予想されます。安心して友達と関われる場所として保育園や幼稚園は貴重な場所です。私たちは、たくさんさんの友達や保育者と関わりが持てるようにしていきたいと思っています。

森友会では、年齢別のクラスがありません。基本的には「0歳～1歳」の乳児の部屋と「2歳～5歳」の大きな幼児の部屋があるだけです。一昔前の子どもたちは、近所で集まり、さまざまな年齢の子どもが群れて遊んでいました。いわゆるガキ大将集団です。そして、地域の大人は子どもたちを見守り、どの子どもにも声をかけていました。そこには、今の時代には失われた大事なものがあつたと思っています。

森友会では、違う年齢の子どもが、当たり前のように一つのテーブルで一緒に絵を描いたり何か作ったりしています。その中で子どもたちは、年上の子どもの作るものに憧れ、道具の使い方を見て学び、そして年下の子どもにも声をかけ、面倒を見てあげています。乳児の部屋でも、0歳の子が泣いていると、1歳の子が近づいて顔をなで



てあげたりしています。一方では、同じ年齢の子ども同士集まって園庭で遊んだり、一緒にごはんを食べたりもしています。その中で仲間意識が生まれ、学びあったり競いあったりもしています。違う年齢の子どもとも、同じ年齢の子どもとも、そのときの自分の欲求や必要に応じて自然に触れ合い、つきあっているのです。そして保育士は、チームを組み、協力して仕事をしながら、どの子どもにも目をかけ、心をつかい、声をかけています。一人の子どもについて、色々な見方を伝え合ったり、発見を教え合ったりしています。子どもたちは、たくさん大人の行動や言葉から、自然に多くのことを学んでいます。

大勢の友達と遊び、大人に見守られることが、子どもたちの成長を支えているのだと思います。

## ごあいさつ

1930年に大分県佐賀関町で産声を上げた学校法人立山学園「佐賀関幼稚園」の姉妹園として1999年に「よいこの森」は設立されました。

2001年には社会福祉法人を設立し、名称も「よいこの森保育園」へと変更し、現在では東京、福岡においても認定こども園や認可保育園を運営するようになりました。

当法人では「すべての子どもの最善の利益のために」を保育理念とし、子ども中心の保育を実践しています。

これからの時代、少子化の影響により子どもたちが切磋琢磨し、コミュニケーション能力を身に付けていく時間・空間・仲間が減少していく中で、グローバル化やAIの発達は進み、より多種多様な出来事に対応していくことが求められます。

そのためにも子ども主体の保育を保護者の皆様と一緒に、協力し合って育てていくことが、子どもたちの最善の利益につながると信じています。このコンセプトブックをしっかりと読みいただくことがその第一歩になると思います。

理事長 立山 貴史



content

- ① 「大勢の友達と遊び、大人に見守られて育つ」環境がある
- ② 「やりたいことがある、できる」ほうが良いに決まっている
- ③ 子どもには「ケガをする権利」がある
- ④ 「食事を楽しむ」ことが好き嫌いをなくす一番の近道
- ⑤ 「積極的に表現する力と人と協力する力」が育つために
- ⑥ 「大事な存在だということを実感してもらおう」ための保育

### 「やりたいことがある、できる」ほうが良いに決まっている

**多** くの保育園のイメージは、保育士がその日の計画を考え、散歩や園庭遊び、造形活動などを「やらせてくれる」「やってくれる」ものだと思うようです。しかし、本当に保育士の考えた計画は子どもたちのやりたいことなのでしょうか。森友会では「誰と」「どこで」「何を」「なに」の「選択する」ことをたくさん経験してもらいます。

子どもは、遊ぶことで成長します。「園庭の山に登る」「駆け回る」「砂場で友達と遊ぶ」「ブロックで好きなものを組み立てる」「はさみやのりを使って集中して工作をする」など様々な活動が見られます。

そのような姿を観察していると、今の自分の体や心の成長に必要なことを自然に選んでいるような気がします。人間は、やりたいことが十分にでき、その中で新たな発見をし、自分が成長していくときに一番充実感を感じます。そしてそれが、自分を信頼し、自信をもって生きていくことにつながるのです。自分を信頼し、自信を持って生きていくことは、人間の一番もとなる大事な力です。では、子どもが十分に遊ぶために必要なことは何でしょうか。



まず、自分で活動を選べるゆつたりした自由な時間です。そして、園庭の自然、子どもたちが興味を持ち遊ぶことで子どもが成長しているような玩具や工夫して何かを作ったみたくなるような教材や道具、そしていっしょに遊べる友達です。

森友会では、子どもが活動を選ぶことができるような時間や環境が保育の軸になってます。まわりには同年齢の子、年上の子、年下の子と、たくさん友達がいいます。そして保育士は、子どもの活動を見守りながら、保育室や園庭を子どもにとって魅力のある、充実した遊びができる場にするのを大事に仕事にしています。

### 「積極的に表現する力と人と協力する力」が育つために

**森** 友会では表現することを大事にしています。フェスティバル(発表会)では、全員が協力し、全員が主役になれるようなオペレッタを発表しています。一人一人が活動を選ぶことが保育の中心ですが、子どもたちには「みんなと一緒にすることをやりたい」「友達と交流しながら自分を表現したい」という欲求もあるのです。

森友会が取り組んでいるオペレッタは、見栄えのよい舞台を作ることを目的にしているものではありません。「どの子どもも思い切って自分を表現すること」と「友達と力を合わせて一つのものを作っていくこと」を目的にしています。

「3びきのこぶた」で、おおか



みがこぶたの家に近づいていくところでは、おおかみになった子は顔までこわくなり、手にも足にも力を入れてこぶたの家に近づいていきます。こぶたになった子は、座ってこわそうにふるえています。家ぶき飛ばされると、こぶたたちは「わーっ」と言いながらとんでいきます。子どもたちは「もう一度やろう。」と言って、何回もこの場面をやりたがります。

「スイミー」では、海の中のくらげやいそぎんちやく、うなぎなどの生き物の表現を、子どもたちは友達と協力しながらアイデアを考え、生き生きと表現します。そして、すっきりと立ち、友達と気持ちを一つにして見事な集中力で歌います。



表現活動でも、みんなが同じ時期に同じことができるようになるわけではありません。なかなか集団の中に入れない子もいます。でも、楽しい活動を用意し、誘い続け、できたことを誉め続けていけば、少しずつみんなが表現を楽しむようになり、友達と力を合わせて一つの場面を作ることができるようになっていきます。年長児の堂々とした、気持ちが一つになった表現活動を見ていると、卒園するまでにはどの子どもも、自分を生き生きと表現し、集団の中で協力しながら行動できるように育ってきていることがよくわかります。

### 「食事を楽しむ」ことが好き嫌いをなくす一番の近道



**小** 学校の給食時に嫌いなものを食べられずに完食できない友達はいましたか？その子たちにとって食事の時間は苦痛だったのではないのでしょうか。大人になってもトラウマになっている人もいます。もし、大人が好き嫌いをなくして欲しいと思うのであれば、食事を楽しむことが一番の近道と言えるでしょう。

保育園に通うご家庭の生活リズムは様々です。朝はやく登園する子の朝ごはんの時間はきつと早いでしょう。さらには前日の寝る時間や夕食の時間も影響してきます。様々な生活スタイルがあるなか、決められた時間に食事を摂ることは子どもにとっても難しいことかもしれません。ですので、食事の場面でも子どもの自主



性を育てることを大事にし、食事を楽しんでもらっています。子どもたちは、自分が「食べよう」と思ったときに、テーブルのあいだの席につきまします。そして自分の名前を呼んでもらうのを待ちます。名前を呼ばれると配膳台の前に並び、保育士と「これはどのくらい食べますか？」などと言葉をかわしながら配膳してもらいます。そして自分の席まで運び、お皿をテーブルに並べてからお皿を返します。(歩ける子は乳児も友達や保育士と会話をしながら食事を終えると、食器を種類別に片付けます。食べる時間と場所を自分で選ぶこと、待つこと、自分の食べられる量を言葉で伝えること、注意深く食器を運ぶこと。これらすべてを楽しむ行いで、食事のたびに心と体が育っているのです。

### 子どもには「ケガをする権利」がある

**子** どもの筋肉は弱く、関節は柔らかいので、この柔軟性には意味があります。柔軟であるために少々のことでは骨折しませんが、成長期には擦り傷などのケガもあつという間に治ります。子どもたちは能動的な遊びのなかで、さまざまなケガに遭遇し、その経験から慎重さを身に付けます。そのような意味から「小さなケガは、大きなケガの最大の予防」と言われるのです。

ドイツ・バイエルン州の幼児カリキュラムには「子どもはケガをする権利がある」と書かれています。この言葉を最初に見たときに、少々違和感がありました。しかし、よく考えてみると、まさしく、ケガをすることによって子どもは徐々に慎重な振る舞いを学びます。主にアスファルトの平らな地面で生活していれば、少してこぼさず斜面ですぐに転びます。上り坂下り坂を駆け回るとはとても難しいです。近頃、口や歯など、顔をケガする子どもが目立つようになりまし。転倒しても手が出ないので、顔面のケガに至ります。

このことは子どものせいではありません。小さい頃のハイハイの経験不足や、でこぼこな地面で遊ぶ経験不足など、子どもが育つ環境のなかに大きな原因があると思われ



ます。幼児期から小学校低学年までは、体力を高めるよりも、神経系の発達を基礎とした運動機能の発達を促す能動的な遊びが非常に大切だとされています。

鬼ごっこ、かくれんぼなど、友達との心から楽しい遊びの場面、視覚や触覚などのさまざまな感覚を動かせる体験で、バランスをとりながら腕や足などの多くの身体の育ちを促すことになりまし。ケガを恐れるあまり、「危ない！危ない！」という制止の言葉を多用しては、冒険心や俊敏性、しなやかな身のこなしを身に付けることは難しいと思われまし。自ら勇気を出してやっつたことでケガをしまつても、その痛みや傷は子どもにとって自らの勳章になるでしょう。

しかし、親に無理やりやらされたことで起こったケガは、心の傷となつて子どもの中に残ります。たちの悪いことに、そのキズのおかげでそ

のことが嫌いになり、それがスポーツならば再挑戦することが難しくなる場合もありまし。一流のスポーツ選手を調査してみると、幼児期から小学校低学年までに共通した傾向が見られます。

○専門のスポーツに専念したのは、小学校高学年以降。それまでは友達との遊びや、並行してさまざまなスポーツをしていた。

○幼児期から小学校低・中学年にかけては一日に二・三時間、さまざまな遊びを経験した。

みんなを一流選手にするわけではありませんが、体力があつて身体を動かすことが好きで活躍できる基礎は、幼児期と小学校低学年の時期に育まれることがわかりまし。大人のおおらかな見守りのなかで、心ゆくまで遊び、さまざまなケガの経験もすることがもつとも重要なのです。

## おわりに

最後までお読みいただき、ありがとうございました。1日の大半を保育園で過ごすさまざまなことが起こります。決してよいことばかりではありません。そんな時は子どもを中心に、皆様と話し、協力し合える園を目指します。数年間の短いお付き合いですが、皆様の一生のなかに最高の思い出になるように努力していきます。どうぞよろしく願いたします。

職員一同

## 施設紹介

社会福祉法人 森友会 理事長 立山 貴史

法人本部 〒870-0025 大分市顕徳町2-2-41 ☎097-536-6006

- 東京 なかよしの森保育園
- ともだちの森保育園
- たのしい森保育園
- えがおの森保育園
- やさしい森保育園
- こもれびの森保育園
- あかねの森保育園
- ひだまりの森保育園
- うれしい森保育園
- ほほえみの森保育園
- ふれあいの森保育園
- しきの森保育園
- きらめきの森保育園
- あそびの森保育園
- しあわせの森保育園
- いずみの森保育園
- 大分 よいこの森保育園大在園舎(本園)
- よいこの森保育園角子原園舎(分園)
- かがやきの森保育園
- こころの森保育園
- 福岡 ゆめの森こども園
- きぼうの森保育園
- みらいの森保育園



## Concept 6

### 「大事な存在だということを実感してもらう」ための保育

平成二十七年に、国立青少年教育振興機構を通して、日本、アメリカ、韓国、中国の高校生を対象に「生活の意識」に対する調査が実施されました。その中に「自分について」の項目があります。日本の高校生は、「私は人並みの能力がある」「自分は、体力には自信がある」「自分は、勉強が得意な方だ」「自分の希望は何か叶うと思う」という問いに対して、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合が四か国中で最も低い結果となりました。一方、「自分はダメな人間だと思うことがある」「の問いに対して、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合が高く、米中韓を大きく上回っていました。このような結果から、日本人は自尊心(自己肯定感)が低い傾向があり、内向き志向であることがわかります。自尊心と自己肯定感を高めていくことは、保育や教育の大事な課題だと思います。

です。笑顔で「おはよう」と言う、ハグする、タッチする、すべて子どもを誉めることだと私たちは考えています。食事時であれば、全部食べたことはもちろん、苦手なものでも食べたこと、すわりかたがきれいなこと、自分が食べたものを片付けたこと、お盆を持って配膳台から自分のテーブルまで運べたことなど、誉めることはたくさんあります。誉めるというのは、子どもの行動や存在そのものをいっしょに喜び、それを子どもに伝えることなのです。

子どもを見る目と、子どもにかける声の温かさが、「あなたは大変な子だよ」という大人の気持ち子どもに伝えるのです。子どもは、自分が人に大事にされ、愛されていると感じたときに、自分を大事にし、人を大事にするようになります。そして、人にやさしくすることができるようになるのです。

